

【知事賞】受賞作品と選評

【短歌】

あおばすく

青葉木菟ただふたこゑに闇ふかしご遷座の列つつしみて待つ 藤井 桂子

本殿の造営修理のためご祭神を仮の場所へ移送するのであるが神職が祭礼の衣服をまとい列をなして進む光景はいかにも荘厳である。青葉木菟の二声を通して雰囲気を鮮明に伝えてくれている。

【俳句】

草笛の通り過ぎたる古墳かな 青木 道子

昔の少年達がよく唇に当て鳴らした草笛。しかし今の少年たちはあまり吹かないように思う。古墳を訪れた作者が耳にした草笛は、地元の昔の少年の散策の景であろうか。読みを重ねれば、古墳時代の人達の草笛かともものミステリー感もあり、古墳の多い郷土のロマンに思いがめぐる。

【川柳】

快方に向い命が笑いだす 柳樂たえこ

大切な命、重たい命、永い闘病生活だった。快方に向ったのがよくわかる。何を見ても嬉しい。食事は少しずつ美味しくなった。花が開き出すように「命が笑い出す・・・」の表現が素晴らしい。

【詩】

くるぶし

「 蹠 」 升田 尚世

川の中州に立つ「わたし」とそこに懸命に泳ぎいたろうとする「あなた」の、美しい幻想詩。二人の背後にある物語は大胆に省略されていて、読者は自由に想像をめぐらして楽しめます。この詩の題名を「蹠」としたところが、すごい！ 映像の喚起力が際立つ作品です。

【散文】

「バースデイプレゼント」 牧尾 実

女主人公は三十年ぶりに郷里の松江駅に降りた。往時を回想しながらバスで郊外にあった旧宅跡に行ってみるが、新しい街路に変貌していた。音楽教師の父が盗みを働いたことから、家族の生活は暗転し、夫婦は離婚、母と娘は上京した。娘は少女時代に父からバースデイプレゼントにラヴェルの「ボレロ」の曲が入ったレコードを買ってもらったことがあった。父親は松江に住んでいるはずだった。駅前の「LA」というジャズ喫茶に入ると、初老の男がピアノでボレロの曲を生演奏を始める。演奏が終わると、女はピアニストの傍らへと歩き出す。短編を紡ぐ力量はたいしたものだ。

【ジュニア部門大賞】受賞作品と選評

【短歌】

マウンドに立つとなぜだか心臓が鼓動の音が体中にひびく 村山 貴規

当然、闘志や責任感による緊張を意識している作者。「なぜだか心臓が鼓動の音が」と畳みかける、それが中学生らしい強がり伝えて明るい作品になっている。自分への応援歌であろう。

【俳句】

風鈴の音が家中和ませる 石倉 樹

夏の暑さを少しでもやわらげようと工夫された風鈴。風のない日に少しでも風のそよぎを知ろうとする心が、風鈴のかすかな音に涼味を感じるのである。日曜日や夕食のあととか一家のまどいの時に鳴る風鈴の音は家中が和むもの。親子の情の機微を超えての和やかな一家の雰囲気表現されている作品である。

【川柳】

自転車がぼくの自由をふくらます 新谷 祐貴

僕たちは学生だから、生活にいろいろ制限がある。でも心の中では誰でも、あれもしたい、これも大人のように・・・と成長に合わせて思う。たった一台の愛用の自転車が、「自由をふくらます・・・」この句の表現が実に初々しく心に迫ってくるのだ。目の前に嬉しそうな自転車少年が見える。

【詩】

「魚の目」 南場 智揮

お姉さんの足の裏にできた魚の目との格闘を、1行たりともそこから逸れることなく描ききった詩で、他の詩を寄せつけないパワーをもっています。一般の部の詩と比べても、けっして見劣りしません。魚の目がじっとこちらを睨んでいるかのような迫力を、この詩はみごとに表現しています。